

災害に備える！愛犬と生き抜くための防災ガイド【完全版】

著者：河崎哲也（防災士・甲種防火防災管理者・愛犬飼育管理士）

はじめに

災害は、私たちの日常を突如として奪います。地震、豪雨、台風、大規模な火災。これらの脅威は、人間だけでなく、私たちの生活を彩るかけがえのない家族、愛犬の命をも危険にさらします。

愛犬は、自然災害がもたらす大音量や激しい揺れを、人間よりはるかに敏感に察知します。その結果、強い恐怖やパニック状態に陥り、飼い主ですら手がつけられなくなることがあります。事前の準備がなければ、避難が遅れたり、最悪の場合、愛犬と離れ離れになるという悲劇も起こり得ます。しかし、正しい知識と具体的な備えがあれば、このような事態は防ぐことができます。

このガイドブックは、単なる持ち物リストやチェックリストを超えた、愛犬との絆を守るための実践的な指南書です。災害時の愛犬の心理を理解し、そのストレスを最小限に抑えるためのトレーニング方法、避難所での具体的な振る舞い方、そして平時から築くべきコミュニティとの連携方法まで、あらゆる角度から「愛犬と生き抜くための防災」を網羅しています。

今日から始める小さな一歩が、愛犬との未来を守るための大きな力となります。さあ、一緒に「もしも」の時の安心を築き上げていきましょう。

第1章 愛犬の防災心理学：災害時に何が起こるかを知る

1-1. 災害時の犬の心理と行動パターン：そのサインを科学的に読み解く

犬の感覚は、人間が想像する以上に鋭敏です。特に聴覚と嗅覚は、人間よりも数千倍も発達しており、これが災害時に愛犬がパニックに陥る最大の要因となります。

地震を例に挙げてみましょう。人間が揺れを感じる数秒から数十秒前、犬は「P波」と呼ばれる初期微動を、地鳴りという低周波音として察知します。この普段聞き慣れない不気味な音は、犬に強い不安と恐怖を植え付けます。さらに、本震のS波による大きな揺れと、それに伴う建物のきしむ音、ガラスが割れる音、家具が倒れる音といった突発的な大音量が加わると、犬のパニックは頂点に達します。この極度のストレス状態では、飼い主の声も耳に入らず、**逃走行動**（走り回る、隠れる）、**破壊行動**（物を噛み砕く、

引っ掻く)、あるいは硬直(フリーズ)といった、普段の行動からは想像できない反応を引き起こします。

また、災害時の環境の変化も深刻なストレス要因です。見慣れない避難所の匂い、知らない人や他の動物の存在、そして何よりも飼い主の動揺した感情を敏感に察知し、犬も同様に落ち着きを失います。この心理的ストレスは、自律神経の乱れを引き起こし、**消化器系への影響**(下痢、嘔吐、食欲不振)や、**情緒の不安定化**(無駄吠え、うなり声、攻撃性)といった形で身体に現れることがあります。これらのサインを事前に理解し、冷静に対応することが、愛犬の命を守るために不可欠です。

1-2. ストレスを最小限に抑えるための専門的な実践トレーニング

災害時の犬のストレスを軽減させるには、日頃からの「慣れ」を目的とした体系的なトレーニングが最も効果的です。以下に、専門家が推奨する実践的なトレーニング法を詳しく説明します。

1-2-1. サウンドセラピー(音慣れトレーニング)

これは、恐怖の原因となる特定の音を、愛犬にとってポジティブな経験と結びつけることで、**条件付け**を行うトレーニングです。

1. **音源の準備**: 雷、花火、地震の地鳴りなどを録音した音源を用意します。
2. **低音量から開始**: 愛犬が気づかないほどの小さな音量で再生します。この時、**クリックートレーニング**を取り入れ、音が鳴っている間に「**クリック音**」を鳴らし、同時にご褒美のおやつを与えます。
3. **徐々に音量を上げる**: 愛犬がリラックスしていることを確認しながら、少しずつ音量を上げていきます。音が鳴るたびにクリックとご褒美を繰り返すことで、「この音は良いことが起こるサインだ」と学習させます。
4. **応用**: 慣れてきたら、異なる種類の音源を混ぜて再生し、様々な状況に対応できるようにします。

1-2-2. クレート・ケージ・トレーニング

クレートやケージは、災害時に愛犬が身を守るための「**安全基地(セーフティゾーン)**」となります。このトレーニングは、ケージを罰を与える場所ではなく、自ら進んで入りたくなるような場所にするのが目的です。

1. **ポジティブな環境設定**: ケージの中に愛犬のお気に入りのおもちゃ、おやつ、そして匂いのついたブランケットを入れます。

2. **自発的な行動を促す:** ケージの扉を開けたままにし、愛犬が自ら中に入るのを待ちます。入ったらすぐに褒め、ご褒美を与えます。無理やり押し込んではいけません。
3. **徐々に時間を延長:** 愛犬が中に入ってリラックスするようになったら、短時間扉を閉めてみます。扉を閉めている間も、落ち着いていればご褒美を与え、時間を少しずつ延ばしていきます。
4. **避難シミュレーション:** 普段から、ケージに入った状態で車に乗る、家の中を移動するといった訓練を行い、いざという時にスムーズに行動できるようにしておきましょう。

1-2-3. 指示トレーニングの徹底と応用

災害時の興奮状態では、基本的な指示が命綱となります。「マテ」や「オイデ」といった指示を、どんな環境下でも確実に従うよう、徹底的に訓練しておきましょう。

- **遠隔指示:** 飼い主と離れた場所でも指示に従う練習を行います。
- **緊急時の呼称:** パニック時に名前を呼んでも反応しない可能性を考慮し、「マテ！」や「ハウス！」といった明確で短い緊急時の呼称を決めておくのが効果的です。

これらのトレーニングは、愛犬のストレス耐性を高めるだけでなく、飼い主と愛犬の信頼関係をより一層深めることにも繋がります。

第2章 完全版！愛犬の防災バッグと備蓄リスト

防災バッグは、愛犬の命と健康を直接守るための生命線です。最低でも5日分、できれば7日分の備蓄を想定して準備しましょう。

2-1. 必須アイテム：生命維持と安全確保のためのメディカル・コア

防災バッグは、愛犬の生命を維持し、安全を確保するための**移動式メディカルユニット**と捉えてください。最低でも5日分、可能であれば7日分の備蓄を想定し、愛犬の個別の健康状態に合わせてカスタマイズすることが重要です。

- **ドッグフードと水：栄養学的アプローチ**
 - **フード:** 普段与えているドッグフードを、**高密度ポリエチレン製の袋**（ジップロックなど）に小分けにして、日付と量を明記しておきましょう。災害時の極度のストレスは、犬の消化器系に影響を与え、食欲不振や胃腸炎

を引き起こす可能性があります。そのため、高嗜好性かつ高カロリーのウェットフードやフリーズドライフードを数食分用意しておく、食欲が落ちた際にも栄養補給がしやすくなります。これらは水分も同時に摂取できるため、脱水症状の予防にも役立ちます。

- 水: 飲水は、体重 1kg あたり 1 日に約 40～60ml が目安です。この量を基に、最低 5 日分を計算して備蓄してください。水はフードの摂取量に大きく影響するため、いつでも清潔な水が飲めるように携帯用給水器と併せて用意します。
 - **首輪・リード・ハーネスの予備: 安全工学に基づく選択**
 - **首輪・リード:** 普段使っているものの他に、高強度ナイロン製や反射材がついたものを予備として用意します。特に夜間や視界の悪い状況下での避難では、反射材が愛犬の存在を知らせ、交通事故や二次的な事故を防ぐ重要な役割を果たします。
 - **ハーネス:** パニックに陥った犬は、首輪から抜け出そうと強く引っ張ることがあります。この際、首に大きな負担がかかり、**気管虚脱**や**頸椎損傷**を引き起こすリスクがあります。これを防ぐため、体全体で負荷を分散させるタイプのハーネスを常備することが強く推奨されます。
 - **クレート・ケージ: 精神的安定と物理的保護**
 - 軽量かつ折りたたみ式のクレートやケージは、愛犬を災害の危険(倒壊物、破片など)から物理的に守るだけでなく、**メンタルヘルス**の維持にも不可欠です。避難所のような慣れない環境下では、ケージは愛犬にとって「自分だけの安全な空間」となり、ストレスを軽減させる重要な役割を果たします。
 - **投薬情報・常備薬・メディカルセット: 緊急医療対応**
 - **常備薬:** 持病がある場合は、かかりつけの獣医師と相談し、多めに処方してもらい、**耐熱性・防水性のあるケース**に入れて保管します。薬の内容、成分、投与量、投与時間を明記した書面を必ず添えてください。
 - **メディカルセット:** **止血剤(ガーゼ)**、**消毒液**、**包帯**、**絆創膏**、**使い捨て手袋**、**ピンセット**、**ハサミ**、**体温計**などを一つのポーチにまとめておきましょう。災害時には怪我を負うリスクが高まるため、飼い主自身が応急処置を施せるように準備しておくことが重要です。
 - **ワクチン証明書・健康手帳: 感染症管理と個体識別**
 - **書類:** 最新の**狂犬病予防接種証明書**や**混合ワクチン接種証明書**のコピーを防水ケースに入れておきましょう。避難所では他の動物との接触が避けられず、感染症が蔓延するリスクがあります。これらの書類は、愛犬の健康状態を証明し、他の避難者への安心材料にもなります。
 - **個体識別:** マイクロチップの装着は、迷子になった際の確実な身元確認手段です。チップの番号と登録機関の連絡先をメモしておき、万が一の事態に備えましょう。
-

2-2. 便利なアイテム: 衛生管理と心理的ストレスの緩和

これらのアイテムは、直接的な生命維持には関わらないかもしれませんが、避難生活の質を向上させ、愛犬のストレスを大幅に軽減させる上で欠かせません。

- **タオル・毛布: 嗅覚による安心感の提供**
 - 愛犬の匂いがついたタオルや毛布は、嗅覚を通じて愛犬に安心感を与えます。見慣れない環境で、自分の匂いに包まれることは、ストレスを軽減し、精神的な安定に繋がります。体を拭いたり、防寒対策としても多用途に利用できます。
 - **トイレ用品: 公衆衛生の確保**
 - ペットシート、消臭スプレー、うんち袋は、避難所の衛生管理に必須です。特に消臭スプレーは、他の避難者の不快感を最小限に抑え、トラブルを未然に防ぐ上で極めて重要です。使用済みのシートや排泄物は、指定された方法で速やかに処理しましょう。
 - **おもちゃ・ガム: 行動学的アプローチ**
 - 見慣れたおもちゃや噛むおもちゃ(ガム)は、愛犬の注意をそらし、破壊行動や無駄吠えを抑制する効果が期待できます。特に噛む行動は、ストレス解消に繋がり、愛犬の精神的な安定に貢献します。
 - **ウェットティッシュ: 清潔な状態の維持**
 - 愛犬の足を拭いたり、体をきれいにしたりする際に便利です。災害時は水が貴重になるため、体表を清潔に保つことで、皮膚炎や感染症のリスクを軽減できます。
 -
-

第3章 緊急時の行動マニュアル: 初動の30分が命運を分ける

3-1. 災害発生直後の行動マニュアル: 事例から学ぶ初動の鉄則

災害は、場所や時間を選ばず突如として襲いかかります。東日本大震災や熊本地震の教訓から明らかになったのは、災害発生直後の数分から数時間の行動が、その後の運命を大きく左右するということです。愛犬との安全な避難には、事前のシミュレーションと反射的な行動が不可欠です。

- **冷静な指示が愛犬の命綱** 災害時、私たち人間がパニックに陥ると、愛犬は飼い主の動揺を敏感に察知し、強い不安に駆られます。東日本大震災では、パニックになった愛犬が飼い主の手をすり抜け、そのまま行方不明になった事例が多数報告されています。このような悲劇を防ぐため、どんな状況でも落ち着いた

- 声で「オスワリ」「マテ」といった普段から慣れている指示を出すことが極めて重要です。飼い主の落ち着いた声が、愛犬にとって唯一の安心材料となります。
- **リードとハーネスの即時装着** 揺れが収まり次第、何よりも先にリードとハーネスを愛犬に装着してください。室内でも、また一時的な避難であっても、決して外してはいけません。東日本大震災の津波避難では、リードを外してしまったために愛犬が流されてしまった事例、逆にリードが命綱となって飼い主と共に助かった事例も存在します。また、窓ガラスの破片や倒れた家具など、愛犬にとっての危険物を即座に確認し、安全な場所に誘導しましょう。可能であれば、普段から慣れさせているクレートやケージに誘導し、愛犬を物理的に保護することが最も安全です。
 - **避難バッグの持ち出しと確実な情報収集** 災害発生直後は、情報が錯綜し、デマが飛び交いやすくなります。事前に準備しておいた**愛犬用防災バッグ**を素早く持ち出すと同時に、**携帯ラジオやスマートフォンの防災アプリ**など、信頼できる情報源から正確な情報を得ることが重要です。熊本地震では、デマ情報に惑わされ、かえって危険な場所に移動してしまったケースもありました。正確な情報に基づいた判断が、愛犬と自身の命を守ります。

3-2. 避難ルートを選択と実践：多様なリスクを想定した計画

避難所までのルートは、一つだけでなく複数の選択肢を用意しておくことが専門家によって強く推奨されています。実際の災害では、道路の寸断や建物の倒壊、洪水などにより、普段の道が通行不能になることが多々あります。

- **多角的リスクを想定した避難ルートの策定** 東日本大震災では、津波により沿岸部の主要道路が壊滅的な被害を受けました。また、**熊本地震**では、土砂崩れによって山間部の道路が閉鎖されました。これらの事例から、**「崩れやすい斜面」「大雨で冠水しやすい道路」「河川の近く」**など、自然災害のリスクを考慮に入れたルートを複数設定しておくことが不可欠です。普段から愛犬を連れて実際に歩いてみることで、危険箇所を把握し、いざという時の判断を迅速に行えるように訓練しておきましょう。
- **同行避難と車内避難のリスク管理** 「同行避難」は愛犬と一緒に指定避難所まで移動することですが、多くの自治体では避難所内での「同伴避難」（愛犬と一緒に生活すること）は許可されていません。しかし、避難所が満員であったり、愛犬が他の避難者にストレスを与えることを懸念して、**車内避難**を選択するケースも少なくありません。

熊本地震では、多くの被災者が車中泊を余儀なくされましたが、この際、**エコノミークラス症候群**や**熱中症**、**低体温症**といった健康リスクが顕在化しました。特に夏場の車内は、気温が急上昇し、短時間で熱中症を引き起こす危険がありま

す。車内避難を選択する場合は、定期的に車外に出て、愛犬と体を動かす時間を確保し、窓を開けて換気を行うなど、リスクを管理することが重要です。

- **自治体の防災計画を確認する** お住まいの地域の自治体が、どのような避難計画を立てているか、事前に確認しておきましょう。自治体のウェブサイトや防災パンフレットには、ペットの同行避難に関する情報が記載されている場合があります。また、地域の動物病院やペット関連施設と連携し、災害時の支援体制を構築している自治体も増えています。

第4章 避難所での生活とコミュニティとの共存

避難所では、愛犬だけではなく、他の避難者との共同生活が始まります。お互いが快適に過ごせるよう、マナーと配慮を忘れてはなりません。

4-1. 避難所における愛犬の過ごし方と公衆衛生学

災害時の避難所は、様々な人が共同生活を送る特殊な環境です。愛犬のストレスを管理し、同時に他の避難者への配慮を怠らないことが、トラブルを防ぎ、スムーズな避難生活を送る鍵となります。

- **クレート・ケージ内での生活の絶対原則** 東日本大震災や熊本地震の避難所では、ペット同伴が認められた場合でも、**愛犬は基本的にクレートやケージ内で過ごすことが義務付けられました**。これは、愛犬の安全確保と、他の避難者（特に動物アレルギーを持つ人や犬が苦手な人）への配慮のためです。しかし、事前のトレーニングを怠ったために、クレートに入った愛犬が激しく鳴き続け、やむなく飼い主が避難所を出て車中泊を選択する事例が後を絶ちませんでした。クレートやケージは、愛犬にとって「安心できる自分の部屋」となるよう、日頃からポジティブな経験と結びつけておくことが重要です。
- **無駄吠えの心理的・物理的対策** 避難所における犬の鳴き声は、他の避難者にとって大きなストレス源となります。特に夜間は、その鳴き声が不眠を引き起こし、二次的な健康被害に繋がる可能性もあります。日頃から「無駄吠え防止のためのしつけ」を徹底しておくことはもちろんですが、避難所では、愛犬が鳴き始めたらずぐにタオルでケージを覆う、お気に入りのおもちゃで気をそらすといった即効性のある対策を講じる必要があります。
- **排泄物の徹底した衛生管理** 避難所では、トイレの場所やゴミの処理方法が厳格に定められています。ペットの排泄物は、指定された場所で処理し、排泄後はすぐに消臭スプレーを使用するなど、公衆衛生管理を徹底することが、他の

避難者からの理解を得る上で不可欠です。排泄物の適切な処理を怠ると、悪臭や感染症の温床となり、周囲との深刻な対立を引き起こす可能性があります。

4-2. 避難生活における愛犬のヘルスケアとメンタルマネジメント

避難生活は、愛犬の心身に大きな負担をかけます。飼い主が専門的な視点で愛犬の健康を管理することが求められます。

- **栄養学的・生理学的アプローチに基づく食事と水分補給** 極度のストレスは、愛犬の消化器系機能を低下させ、食欲不振や下痢を引き起こしやすくなります。無理に食事をさせようとせず、まずは脱水症状を防ぐために、こまめな水分補給を促しましょう。水分摂取が不十分な場合は、フードを水でふやかして与えるなど、工夫が必要です。また、東日本大震災では、フード不足により普段食べ慣れないものを与えたことで、体調を崩す愛犬が多く見られました。予備のフードを十分に備蓄しておくことの重要性が改めて認識されました。
 - **メンタルヘルスケアとストレスホルモンの抑制** 愛犬のストレスを軽減するには、コルチゾールなどのストレスホルモンの分泌を抑えることが重要です。これは、普段と変わらないルーティンを維持し、飼い主が安心した態度で接することで達成されます。避難所の外で短い散歩をさせたり、慣れ親しんだおもちゃで遊んであげるとは、気分転換になると同時に、愛犬の心理的な安定に繋がります。飼い主の落ち着いた声や穏やかな触れ合いが、何よりも愛犬の心を癒す薬となります。
 - **感染症予防と健康状態のモニタリング** 避難所では、他の動物との接触が増えるため、ノミ・ダニや消化器系感染症のリスクが高まります。事前にノミ・ダニ予防薬やフィラリア予防薬を投与しておくことが、感染症予防の第一歩です。毎日、愛犬の体温(平熱は 38.5 度前後)、呼吸数、心拍数、食欲、排泄物の状態を注意深くチェックしましょう。少しでも異変があれば、速やかに獣医師に相談することが、重篤な状態を未然に防ぐ上で不可欠です。
-

第 5 章 実践！愛犬との防災シミュレーション

5-1. 家庭での避難訓練：医学的・防災学的アプローチによる実践

災害は予測不能な事態を引き起こしますが、事前に訓練を行うことで、恐怖反応を条件反射的な冷静な行動に転換できます。これは、脳の扁桃体(恐怖や不安を司る部位)の過剰な反応を抑制し、前頭前野(思考や判断を司る部位)を機能させるための重要なプロセスです。年数回の訓練は、単なる練習ではなく、いざという時の愛犬と家族の命を守るための身体的・心理的な準備です。

タイムアタック避難: 行動アルゴリズムの構築

地震発生を想定したタイムアタック訓練は、初動の行動を自動化するためのものです。家族全員で役割を分担し、誰が何をすることを明確にすることで、混乱を最小限に抑えられます。

1. 役割分担の明確化:
 - **愛犬担当:** 誰が愛犬をクレートに入れるか、リードを付けるかを決めます。
 - **防災バッグ担当:** 誰が愛犬用の防災バッグを運び出すかを決めます。
 - **情報担当:** 誰がスマートフォンの防災アプリで最新情報を確認するかを決めます。
2. 具体的な行動のシミュレーション:
 - **地震発生(合図):** 家族全員で「地震だ!」と声をかけ、訓練を開始します。
 - **愛犬の保護:** 担当者は、愛犬をクレートに誘導し、扉を確実にロックします。この際、焦らずに落ち着いた声で話しかけることが重要です。
 - **持ち出し品の確認:** 担当者は、愛犬用の防災バッグを素早く持ち出します。
 - **玄関からの退出:** 全員が玄関に集合し、クレートと防災バッグを持って外に出ます。

訓練の評価と改善: 訓練後には、かかった時間を計り、家族で「もっとスムーズにできたことはないか?」「無駄な動きはなかったか?」を話し合います。これにより、初動の行動アルゴリズムを継続的に改善できます。

複数ルートの確認: 地理学的リスク評価と回避

東日本大震災の教訓から、普段の避難ルートが災害時に使えなくなる可能性が高いことが明らかになりました。津波による沿岸部の道路破壊、地震による道路のひび割れや土砂崩れ、豪雨による河川の氾濫など、様々なリスクを考慮したルート設定が不可欠です。

- **ハザードマップの活用:** 自治体が発行しているハザードマップ(洪水、土砂災害、津波など)を確認し、自宅から避難所までのルート上に危険区域がないかをチェックします。
- **複数ルートの実践:** 危険区域を迂回するルートや、高台へ向かうルートなど、最低でも2つ以上の避難ルートを愛犬と一緒に実際に歩いてみましょう。夜間を想定して、懐中電灯を持って訓練することも有効です。

5-2. 近隣コミュニティとの連携：社会的な安全網の構築

災害時には、行政の支援がすぐに届かない場合があります。そのような時、地域のコミュニティが命綱となります。

- **ペット飼育者マップの作成と相互扶助**: 近隣に住むペット飼育者同士で、連絡先や飼っているペットの種類、持病、かかりつけの動物病院などを共有する**「ペット飼育者マップ」を作成しましょう。これにより、災害時に互いの安否を確認したり、ペットを一時的に預けたりする相互扶助の体制**を築けます。熊本地震では、地域住民同士が協力してペットの保護活動を行った事例が多数報告されており、コミュニティの力が改めて証明されました。
- **自治体との連携と防災イベントへの積極的参加**: お住まいの自治体がどのような防災計画を立てているか、ペットの同行避難や避難所での受け入れ体制がどうなっているかを事前に確認しましょう。地域の防災イベントや訓練に積極的に参加し、自治体の担当者や他の住民とコミュニケーションをとることで、ペット同伴の避難に対する理解を深めることができます。一部の自治体では、ペット同伴の防災訓練も実施されています。このような機会があれば、ぜひ参加してみよう。

•

参考. 全国ペット受け入れ避難所の状況

災害時、ペットを連れてどこへ避難すれば良いのか。これは多くの飼い主が抱える最も切実な問題です。しかし、残念ながら、「**全国統一のペット受け入れ可能な避難所**」は存在しません。その理由は、避難所の運営やペット受け入れ方針が、各自治体や施設の判断に委ねられているからです。

東日本大震災や熊本地震、そして近年の豪雨災害の経験から、環境省は「**人とペットの災害対策ガイドライン**」を策定し、ペットの同行避難を強く推奨していますが、このガイドラインに法的な強制力はありません。そのため、自治体ごとに対応にばらつきがあるのが現状です。

飼い主がすべきことは、「自分が住む地域の避難所のルールを正確に把握し、複数の選択肢を準備しておくこと」**です。以下に、そのための具体的な行動指針を解説します。

ステップ 1: お住まいの地域の避難所情報を正確に把握する

まずは、お住まいの市区町村のホームページや防災課に問い合わせ、以下の情報を確認してください。

1. 「指定緊急避難場所」と「指定避難所」の確認

- 多くの自治体では、小学校や公民館が指定避難所として設定されています。
- これらの施設がペットの同行避難を許可しているか、また、ペットと人間が**同じ空間で生活できる「同伴避難」が可能なのか、それとも別々の空間で過ごす「同行避難」**となるのかを確認しましょう。
- **【事例】**熊本地震では、多くの避難所でペットの受け入れルールが未整備のまま、やむなく飼い主とペットを同一空間に受け入れた結果、他の避難者との間でトラブルが発生しました。この教訓から、現在では多くの避難所で、ペットは屋外の専用スペースや体育館の隅など、人間とは離れた場所で過ごすルールが設けられています。

2. 避難所のペット受け入れに関する詳細ルールの確認

- **持ち込み可能なペットの種類:** 犬や猫、小動物は許可されても、大型犬や特定動物(特定外来生物など)は制限される場合があります。
- **飼育スペース:** どこにケージを置くのか、屋外に係留する場所はあるのか。
- **必要物資:** 避難所側でペット用の物資の備蓄があるか(多くの場合は「なし」です)。フード、水、ケージ、排泄物処理用具などは、すべて飼い主が持参する必要があります。

ステップ 2: 複数の避難先を検討する

自治体の指定避難所だけを頼りにするのは危険です。様々なリスクを想定し、複数の避難先を準備しておくことが重要です。

1. 知人や親戚宅への避難

- 最も安心できる選択肢の一つです。事前に愛犬を連れて行っても良いか、了解を得ておきましょう。
- **【事例】**東日本大震災では、多くの飼い主が避難所の環境になじめず、遠方の親戚宅や友人宅に身を寄せました。これにより、愛犬のストレスを軽減し、より安全な生活を送ることができました。

2. 動物関連施設との連携

- 近隣の動物病院やペットホテル、ドッグトレーナーなどが、災害時のペットの一時預かりを行っている場合があります。

- 事前にそのような情報がないか、地域の獣医師会などに問い合わせてみましょう。

3. 車中避難

- プライベートな空間を確保でき、愛犬のストレスを軽減できる反面、エコノミークラス症候群や熱中症など、人にもペットにも深刻な健康リスクがあります。
- 【事例】熊本地震では、多くの被災者が車中泊を余儀なくされましたが、ペット同伴の避難者も多く、適切な換気や水分補給ができないために、熱中症や体調不良を引き起こすケースが見られました。車中避難を選択する場合は、これらのリスクを十分理解し、対策を講じることが不可欠です。

ステップ 3: 自治体の災害対策と連携する

環境省は、ペットの災害対策において、地域住民と行政、そして獣医師会や動物愛護団体が連携する「三位一体の協力体制」を推奨しています。飼い主もこの一員として積極的に関わるのが重要です。

- **地域の防災訓練への参加:** ペット同伴の防災訓練が実施されている場合は、ぜひ参加しましょう。これにより、避難所の管理者や他の住民と顔見知りになり、いざという時のコミュニケーションが円滑になります。
- **「うちトコ動物避難所マップ」の活用:** NPO 法人などが作成している、ペット受け入れ可能な民間施設や避難所を検索できるマップです。事前に自分の地域の情報を登録・確認しておくのが非常に便利です。

結論

災害時のペットの避難先は、**「事前に飼い主自身が情報を収集し、複数の選択肢を準備しておく」**ことで確保されます。いざという時に慌てないためにも、日頃から家族で話し合い、行動計画を立てておきましょう。愛犬の命を守れるのは、飼い主であるあなただけです。

付録:あなたの愛犬のための個別チェックリストとテンプレート

以下の項目にチェックを入れて、防災対策を完了させましょう。

- 災害時、誰が愛犬の担当になりますか？(役割分担)
- 避難バッグの中身は、最新のものに入れ替えていますか？(有効期限の確認)
- 愛犬はクレートやケージに抵抗なく入りますか？
- かかりつけの動物病院の緊急連絡先は控えていますか？
- マイクロチップの登録は済んでいますか？
- 家族以外の誰かに、愛犬を預ける選択肢はありますか？(ペットホテルなど)

最後に

愛犬は、あなたにとってかけがえのない家族です。このガイドを手にとっていただいたあなたは、すでに愛犬との未来を守るための第一歩を踏み出しました。

「災害は忘れた頃にやってくる」と言いますが、私たちはこの教訓を胸に刻み、日々の小さな備えを怠らないようにしましょう。それが、愛犬の命を守る唯一の方法です。

さあ、今日から「もしも」の時の備えを始めましょう。